雪の花

くろひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花

【Ｎコード】

Ｎ１５０３Ｓ

【作者名】

くろひつじ

【あらすじ】

豪雪地帯に住む貧しい男女の子供たち。死にゆく妹が兄にした最後の願いとは。

彩乃の顔や手足は、赤く火照り、急な雨で濡れたようにぐっしょりとしている。
光一は彩乃の汗を拭うために、桶から冷水で浸した布を取り出した。額にそっと触れてみると、布越しなのに燃えるように熱かった。
彩乃が小さな眉を寄せて呼吸を深くする様子から、苦しさが伝わってくる。
彩乃が倒れてからもう三日になる。小学校から帰ってくるなり熱を出して、寝込んでしまった。
それまで病気一つしたことがない元気な彩乃からは、想像も出来ない姿だった。
以来、光一は学校を休んで、昼間は街へ出稼ぎに行っている両親の代わりに、彩乃の看病を付きっきりでしている。しかし病状は少しも良くならなかった。むしろ熱が上がったり、眠っている時間が多くなったりして、どんどん悪くなっていく一方だった。
静かな室内で、時計の針が規則的に進んでいる音が、光一にはまるで命の刻限が迫っているように思えた。だが彩乃は一言も弱音を吐くことがなく、身体の汗を拭いたり、雑炊を食べさせたりする光一に「ありがとう」と健気にも言うのだった。光一は何としても、彩乃を助けたいと思った。
しかし医者に看てもらう為のお金は、両親と、そして光一のお小遣いの入った貯金箱の中身を合わせてもとても足りない。
（神様、どうか彩乃を助けて下さい）
光一は心の中で両手を組んで、一心に願った。普段は暮らしを少しも楽にしてくれない神様など信じていないが、こういう時だけは藁をも掴みたい心境だった。
「お兄ちゃん」
彩乃が閉じていた目を薄く開けて、話しかけてきた。

「どうしたの、彩乃？」
光一は汗を拭う手を止め、彩乃を気遣いながら尋ねた。
「雪が見たい」
「雪だって？　雪なんて、腐るほど見てるじゃないか」
光一は驚いて聞き返した。
光一達が住んでいるところは、冬になると雪が沢山降り積もる豪雪地帯だ。朝早くに起きて、家の周りに降り積もった雪をどかさなければ、外にも出れない時の方が多い。光一と彩乃も眠たい目をこすって、今年に入ってから嫌になる程、両親の手伝いをしている。
「雪が見たい」
彩乃が今度ははっきりと言った。
「……分かったよ。何かあったらすぐに呼んでくれ」
光一はずっと立ち上がると、家の外に出た。彩乃の望みを叶えなければ、何故か後で悔やむような気がした。
それに普段は我が儘を言わない彩乃も、こうなった時は厄介で、一歩も引かないことを知っていた。
あれは、うだるように暑く、けれど大輪の花火が闇に美しく咲いた縁日の夜だった。
金魚すくいの屋台の前で、突然彩乃が立ち止まった。両親や光一は彩乃を喜ばせたいと思ったが、新しい服も買えないのにそんな余裕はどこにもなかった。
もう幼くはない彩乃はそれを知っているはずなのに、その場を一歩も動こうとしなかった。理由を尋ねても、口を固く結んだままだった。ただ真っ赤な鱗がきらきらと光る金魚を追って、丸く見開かれた目が憑かれたように動いていた。結局その時は、屋台の主が彩乃に同情して、金魚を分け与えてくれた。
硝子の鉢に収まった金魚は、彩乃の視線を浴びて、楽しげに泳ぎ回っていた。光一は彩乃が笑っている姿を見て嬉しかった。水換えを手伝ったりもした。
しかし本格的に寒さを迎えた朝、目が真っ白に濁った金魚が水面

にぷかりと浮かんでいた。
光一と彩乃は、庭にある、葉が落ちた樹木の近くに、二人で死骸を埋めた。
暖かくなると赤い花が咲くその樹木を通して、もう一度生まれてこれば良いと彩乃が言った。その言葉が印象に残って、脳裏から離れなかった。
今、外は見渡す限り真っ白な銀世界が広がっていた。よく晴れていて、爽やかな太陽の光が目に入り込んでくる。しかし口から雲のような吐息が出て、春はまだだいぶ先のようだった。
光一は足跡や汚れのついていないところを選んで、雪を両手一杯に掬うと、家に戻った。途中で廊下に雪がこぼれ落ちたが、早く彩乃に見せたくて目もくれなかった。
「彩乃、雪を持ってきたよ」
光一はそう言ってしゃがみ込むと、彩乃に手の平の雪を見せた。
彩乃は黙り込んでいる。
（どうしたのだろう）
「……違う」
彩乃は唸るように言った。
「え？」
「私が欲しいのは、空から降ってくる綺麗な雪の花だ」
「雪の花って？　それより無茶を言うなよ。窓を見てごらん。今は雪は降ってないんだ」
一枚のキャンバスのような木枠に囲まれた窓は、澄み切った青に染まっている。
「良いから持ってきて！！」
彩乃は突然起き上がって吼えたかと思うと、布団に気力を使い果たしたように倒れ込んだ。胸を速く動かして、荒い息をしている。
「大丈夫！？」
光一は思わず手の中の雪を床に落として、彩乃の手を強く握った。雪で冷たくなった手がいきなり暖まって、光一は突き刺さるような

痛みを覚えた。
「お願い、雪の花を……」
彩乃は掠れた声で言った。
「分かった。必ず持ってくるよ」
(今は安静にさせておかなければ)
光一はそんな気持ちで約束すると、彩乃が光一の手を弱々しく、けれど確かに握り返した。
彩乃が眠っても、雪が降る気配はなかった。

日が沈み、月が昇り、いっときの、けれど光一にとっては気の遠くなるような時間が過ぎていった。
辺りがすっかり暗くなった頃、窓の中に銀色の雪が出たり入ったりし始めた。
この地方では、良い天気が突然変わることがない訳ではない。
光一は泣きたくなるほど嬉しくなって、家の外に飛び出した。
辺りはすっかり暗くなっている。光一は何故かもの悲しい気持ちになった。夜の駅にいる時のようだ。
骨のようになった木の枝々に葉の代わりについた雪が、ざざあっ、と地上に落ちる音が聞こえて、どきりとする。気を取り直して、家の明かりに照らされながら降って来る雪の結晶を、手の平で受け止めた。
手裏剣、星、蜘蛛の巣、松の葉……さまざまな形の中から花のような形をしたものを見つけた。
(これが彩乃の言っていた雪の花だろうか。それにしても、今まで気に留めたことはなかったけれど、雪にも色んな形があるんだなあ。まるで人間のようだ)
そんな感想を抱いた後、手の平の上で雪の花がじわじわと溶け出していくのを感じて、慌てて家に戻った。
「おかえりなさい」
外に出る前は眠っていた彩乃が声を掛けてきた。

「うん。彩乃、雪の花ってこれのことだろう？」
光一は彩乃に雪の結晶を見せた。
「うん、そうだよ。綺麗……お兄ちゃん、ありがとう……」
彩乃がぱっと雪の花が本物になったかのような笑みを浮かべると、そのままゆっくりと目を閉じた。
（喜んでくれて良かった）
安堵した光一は、何かがおかしいと感じた。しばらく考えて、はっと思い当たる。
彩乃の息が、ある一点で止まっているのだ。
「彩乃！？」
驚いて彩乃の身体を揺すってみても、反応が全くない。しかもあんなに熱かった身体が、今では雪のように冷たくなっている。光一は頭に冷水を流し込まれたような衝撃を受けた。
（そんな。さっき雪の結晶を見せた時、ありがとうって……）
呆然とする光一の手の中で、雪の花が溶けてどこかに消えようとしていた。
その時、時計がボーンボーン、と午後六時を示す重たい音を鳴らした。それと同時に、玄関の鍵を回して、扉を開く音がした。母が帰って来たのだ。
「光一、なんで廊下がこんなに濡れているの！？」
部屋に来るなり、母は光一を叱りつけた。しかし光一の顔を見るなり、何かを悟ったように蒼くなった。
「何か、あったのね？」
母の問いかけに、光一は思わず溢れ出しそうな思いをこらえて頷いた。
母は彩乃に一目散に駆け寄って縋り付くと、突然関を切ったようにわっと泣き始めた。
「彩乃は死ぬ前に雪の花が見たいと言ったんだ。きっと自分を溶けていく雪の花と重ねたんだ……」
隣の母の横顔に向かって、光一はぽつりと呟いた。

すると母が涙で泣き濡れた顔を上げた。先ほどまで泣いていた人間とは思えない程凛とした姿に、光一は驚いた。

「見てごらん」

母に促された光一は、彩乃を見つめた。

目じりは垂れ下がり、口元は緩やかな円弧を描いていた。幸せそうに微笑むその姿は、まるで眠っているかのようだった。

（大自然の前に人は無力だ。でも春が来たって、たった一つだけ見つけたこの笑みを、絶対に溶けさせたりしない。彩乃にとっての、金魚や…雪の……）

閉じていく彩乃の目が辛く思い出される中、雪の花が最後の灯火のようにきらきらと光った。

（後書き）

もうすぐ春ですが、雪の話をお届けしました。
近親相姦も良いと思ったのですが、この子供たちは精神的な結びつきが強いようなので止めておきました。またの機会に。

作者のサイト．ｈｔｔｐ：／／ａｏｎｏｙｕｈｉ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
シリアス系ジャンル雑多な小説サイト。
ＢＬなどにも着手しています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1503s/

雪の花

2011年4月9日01時49分発行